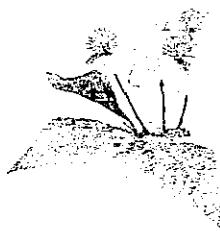


社会問題と葛藤する

— 知的障害者のきょうだい —



大阪府高槻中学・高等学校 教諭

ようだ たつあき
楊田 龍明

はじめに

私は政治経済を教えて10年になる。政治経済を教える中で、社会の仕組みや現実を知るだけでなく、社会の一員として社会が目指す理想とは何かを、一人ひとりが見すえ、考えてこそ力強い社会のメンバーとして生きていける。私はそう考えている。

高等学校学習指導要領には「政治経済の目標」として「諸課題について主体的に考察させ、公正な判断力を養い、良識ある公民として必要な能力と態度を育てる」と記されている。ここに紹介するのはこの「主体的に考察し、公正な判断力を持った良識ある公民」を育てるために行った私なりの取り組みである。生徒に主体的に考えさせるには、教師自身が「社会にある課題を生徒と一緒に葛藤する」ことが必要であると考えている。今回紹介するのは、そんな考え方から行った取り組みの1つである。

本編に入る前に、私の勤務する高槻中学・高等学校について述べたい。

本校は中高一貫の私学の男子校であり、進学校として位置づけられている。私が専門とする公民科は中学3年公民、高校1年政治経済で必修科目として学習する。今回紹介する取り組みは、2009年に高校1年政治経済で行ったものである。また、私は彼らを中学1年から持ち上がって授業を担当し接してきた。

I. 授業実践例

「知的障害者とのきょうだい」

テーマに行き着くまでの道のり

「社会にある答えのない課題を生徒と一緒に葛藤」したい。「葛藤する」とは何か？ 分かりにくいかもしれない。自身の中にわき起こる相反する感情や考えと向き合い、何が答えか？ とことん考え方格闘する事と言えるだろうか。

単に考えさせるだけでなく、葛藤するテーマを見つけることは実に難しい。生徒を葛藤させるには、私自身が自身と向き合い、とことん格闘せね

ばならない。今回の取り組みに至るまでに5年間の月日を要した。まずは、そこに至るまでの道のりを振り返りたい。

常々、生徒と共に葛藤するテーマを探していた私が強い関心を抱いたのは、知的障害者についてだった。

生徒たちは友達同士の会話の中で、「おまえ、アホか！」と同じように「おまえ、ガイジ（ショウガイ）か！」と平気で言つてのける。余りに平然と口にするその感覚に強い不快感を何度も覚えた。けれども、注意はしても強く指導できない自分の弱さにも気付いていた。その弱さとは自分自身、知的障害者について何も知らないということ。かつて中学生だった頃の自分も「ガイジ」という言葉を平然と口していたこと。そして、その時も今も自分は知的障害者と身近に接し、考える機会は一度もなかったということ。生徒達が「害児」と平然と口にするのも、身近に接する機会もなく、知的障害者について何も知らず、考えたことがないからではないか？ なにかもっと真剣に考える機会があつて良いのではないか？ 生徒と一緒に知的障害者についてとことん考える授業をしてみたい。そう思うようになっていた。

5年前にそう決意して以来、知的障害者について考える題材を探し求めてきた。いくつもの題材と出会った。その中で印象に残ったものを紹介したい。

在日韓国人の自閉症の青年を描いた自主製作ドキュメント映画『自転車で行こう』。この映画の中で、自閉症の青年と幼なじみの健常者の女性は次のように言った。「小さい頃は彼に“アホか”って言ってはダメだと教わってきた。だけど、彼と長く付き合ってきて“お前はアホか”と平気で言えるようになった」。幼なじみで十数年、身近でずっと接してきたから、口に出来るアリノママの言葉は、強く印象に残っている。

制度や社会の仕組みから考えさせることはできないかと考え読んだのは、『障害者の経済学』（中島隆信著／東洋経済新報社）。クールに、同時に温かみのある視線で障害者福祉や教育問題を経済学的に解説。著者の学問への姿勢と内容に目

頭が真っ赤になる秀逸の本だった。

『こんな夜更けにバナナかよ』(渡辺一史著 / 北海道新聞社)。進行性筋ジストロフィーと闘う鹿野さんと24時間態勢で支えるボランティアとの交流は、生臭く人間らしさ満載。清く正しい障害者とボランティアのお涙ちょうどいの話ではなく、「障害者といつても、エゴもあれば欲もある、普通の煩惱にまみれた人間」のドキュメントもまた、目頭が熱くなる良書だった。

障害者プロレスのドッグレッグスを描いた『無敵のハンディキャップ』(北島行徳著 / 文春文庫)。生身でぶつかる様は、既存の障害者福祉に対する強烈なカウンターとして、考えさせられた。何より生でドッグレッグスを見てみたいと思った。

日本の障害者運動の歴史に残る「青い芝の会」。障害のある子どもの行く末を悲観して、親が子供を殺害。母親への減刑嘆願に「殺される側」から異議申し立てた『母よ、殺すな』(横塚晃一著 / 生活書院)と映画『さようならCP』(原一男監督)。「あってはならない存在」とされることの差別を暴いた自立生活運動の衝撃は言葉にならない重みがあった。

ヤマト運輸の小倉昌男さんの『福祉を変える経営』(日経BP社)。既成概念を打ち破り、新たな福祉社会を作る取り組みに胸を熱くした。

幾つもの本や映画に出会ったが、障害者問題の何を切り口に考えさせるべきなのか、答えは出なかった。知人に相談すると「考えるのではなく、一緒になにかすることではないだろうか?」と言われた。そして彼は、あるドキュメンタリー番組の話をした。盲学校の生徒がサッカーチームを作ったという。ボールに鈴をつけて猛練習。熱心な顧問の先生が公立中学のサッカーチームに懇願して練習試合を行った。当然、健常者の公立の生徒たちのワンサイドゲーム。それでも盲学校の生徒達は、試合を続けてほしいと頼み、その真剣な姿に健常者である生徒たちの表情が変わっていったのが印象的だと、語ってくれた。なにか障害者と一緒にやってみる。確かに考えることよりも知的障害者と直接接してみることが知的障害者を知ることになると思った。だけど、生徒270人に何と一緒にやらせたらよいのだろう?果たして授業とし

て、義務的にやらせて学べることははあるのだろうか?生活の中で身近に接しない現実を飛び越える取り組みが、果たしてどんな結果を生むのか?どうしても分からなかった。私自身、障害のある友人知人はおらず、接する機会はない。そこにもまた、社会の現実を感じた。

悶々とする中で、読んだのは『獄窓記』。元国会議員の山本譲司さんがつづった刑務所の現実。「山本さん、俺たち障害者はね、生まれた時から罰を受けているようなもんなんだよ。だから、罰を受ける場所は、どこだっていいんだ。どうせ帰る場所もないし……また刑務所の中で過ごしたっていいや」そんな風に語る障害のある受刑者に、衝撃を受けた。2008年2月、大阪でのシンポジウムで山本譲司さんと出会い、直接相談もさせて頂いた。私たちの社会に成人後の人生のほぼすべてを刑務所で過ごさざる得ない障害者がいる現実を生徒に知らせたいと強く思った。

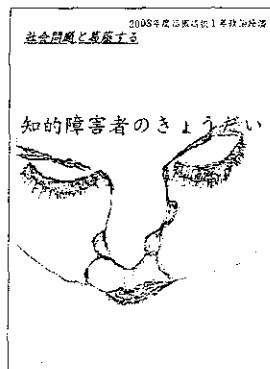
累犯障害者に胸を痛める一方で、ステキなギャラリーに出会った。Gallery Incurve。そこで見た芸術作品は、心躍る格好良さがあった。それが障害者の作業所で作られたものと知り、驚いた。サントリーアート館などでも展覧会が開かれ、その作品は高く評価されていた。芸術の力で高い評価を受ける障害者がいる一方で、刑務所にしか行き場がない障害者がいる。私たちの社会にある障害者を巡る全く異なる状況。

生徒にぜひ知ってほしい事柄はいくつも見つけた。そこには猛烈に訴える力があった。けれども、どんな授業をすべきなのか?ますます分からなくなってしまった。芸術も刑務所も日常とは思えなかった。生徒たちが「自分自身のこと」として知的障害者について考えるには、なにか非日常的に思えたのだ。また私も生徒も葛藤した上で、その葛藤を受け止め対話してくれる当事者がいなければならない。考えれば考えるほど、何を切り口に授業をするべきか、分からなくなってしまった。

ある掲示板との出会い

授業の切り口が見いだせず悶々とする中でインターネットで「ガイジ」と検索して掲示板「知

的障害者のきょうだい」<http://www2u.biglobe.ne.jp/~arakusa/works/kyoudai/kyoudai01.html>と出会った。



授業冊子
「知的障害者のきょうだい」



授業冊子「知的障害者のきょうだい」

初めてこの掲示板を読んだとき、余りに赤裸々な書き込みに思わず屋外に飛び出して夜風に吹かれて考え込んだのを覚えている。「妹は重度の知的障害を持っており、小さな頃から世間から言われ無き差別、偏見を受けて育ってきた。家族の中でも我慢しなければならないことが多かった」。「自分の姉は知的障害を持っており、恋人ができても嫌われたくないから話せない」。「介護疲れで自分の母が亡くなり、重度の知的障害を持つ叔父が死ねばいいと思った」。このように知的障害を持つ家族を疎ましく思う自身に対する嫌悪感、社会の偏見に苦しみ、板挟みになっている様子が生々しく書き込まれていた。「知的障害者のきょうだい」が深く悩み、苦しみ、そしてまだ答えを得ることができていない現実を読み、私自身考え込んだ。

この掲示板を読んで考えたのは2人の友人のことだった。数年前、妹に知的障害があると言った友人にこの授業について相談した。彼は「当事者でない人に知的障害者のことが分かると思わない。分かって欲しいとも思わない」と言った。また、この授業を相談した別の友人から「きょうだいに障害があったこと」を告げられた。10年来の付き合いになる彼女から、きょうだいのことを知らされたのは初めてだった。そして彼女は「あなたの授業は応援するけど、もう聞かないで欲しい」と言った。

どうして彼は「分かるとは思わない」と言ったのか?どうして彼女は「もう聞かないで欲しい」と言ったのか?この赤裸々な掲示板を前に考え込んだ。私たちの社会には何らかの障害を持つ人の割合は、少なくとも5%という。そのきょうだい、家族を含めれば、障害者はもっと身近であるはずだ。にもかかわらず私は、障害者を身近に感じずに過ごしている。「当事者でない人に知的障害者のことを分かるとは思わない」と言った身近な彼の言葉に向き合うことが、私の意図する「社会にある課題を生徒と一緒に葛藤する」取り組みなのではないかと思えた。こうして私は「知的障害者のきょうだい」を切り口に、授業を行うことに決めた。

生徒の課題から

余りに赤裸々な内容にためらいつつも、私は先の掲示板を生徒に示し、作文を課題として出すことにした。この掲示板は障害者の父母による「あらくさの会」が、きょうだいに知的障害者を持つ人の本音を理解して欲しいとの意図で作られたものだった。「あらくさの会」に電話で問い合わせ授業で用いることの了解を得た上で、掲示板の書き込みを編集した冊子『障害者を考える』を生徒に配布し、夏休みの課題とした。270人の高校一年生全員から作文を集めた。生徒達の作文は実際に様々だった。そのいくつかを抜粋して紹介したい。

「僕たちは“障害”的意味をちゃんと知っています。そしてそれは冗談半分では言ってはいけないことだと多く分かっています。しかし日常生活では、普通に“ショウガイみたいなことすんなよ”とか、

“お前、ショウガイか”とか言います。僕も言ったことがあります。しかも、それでみんな簡単に笑ってしまうのです。なぜ（僕も含めて）周りの友達は“ショウガイ”と、簡単に言えるのでしょうか？それは多分障害を持った人が周りにいないからだと思います。冊子『障害者を考える』を読んで、障害のある親類を家族に持つ人が、どれだけ大変か、[分かりました]。障害を持った人が周りにいないのに、[分かりました]というのは、失礼かもしれませんが、やはり大変なんだと改めて認識しました

このように知的障害者を家族に持つ人の声に衝撃を受け、自分自身や社会の偏見を省みる感想が多く見られた。そして『兄バカと障害者』と題して、次の作文を提出した生徒がいた。

「僕が5歳の時、弟が生まれました。兄弟がとても欲しかった当時の僕はとてもうれしくて、親バカならぬ“兄バカ”になってしまいました。

弟が3歳の時、弟は単語を言うだけで会話が出来ません。当時、小学校低学年で自分より小さい子を知らない僕は、“まだ3歳だし発育が遅いんだな”くらいしか思っていませんでした。

弟が小学生の時、3歳の時とほぼ変わっていません。変わったと言えば、単語のバリエーションが増えたくらい。中学生の僕はさすがに勘付いていましたが、親には、はつきりと言わず親も特に何も言いませんでした。

翌年、僕が何となく親の机を探っていると弟の診断書が出てきました。そして前から思っていたことがついに確信になりました。弟は障害を持っていました。

なので、この政経の夏休み課題を受け取った時、我が目を疑いました。まさしく自分の弟のことではないかと。

この掲示板の数々の書き込みを見て共感すると共に、やっぱり将来のことを不安に感じます。今、弟は小学4年生で普通の学校の障害児学級に通い、同学年の普通の子からも親しくしてもらっています。今でこそうまくいっていますが何年かして大きくなると、世間の風当たりが冷たくなります。例をあげるなら電車で時々見かけるうるさくて周りからにらまれる知的障害者。不謹慎ながら、そういう

のを見ると“ああ、弟もああなるのかあ”と思います。もっと大きくなったら、親も世話が大変だし、もし親が亡くなったらどうなるのか——不安は尽きません。書き込みを見て驚いたのは結婚問題。身内に障害者がいるだけでこんなに難しくなるとは……世間は残酷です。

いろいろ将来の不安が出てきましたが、一つだけ言えることは僕と弟は兄弟なんだということです。弟が障害者だろうが、それに対する世間の目が冷たかろうが、そのせいで僕が独身にならうが、親が亡くなろうが、僕と弟は兄弟で、僕は弟と一生付き合わなければいけないです。

いまだに僕は弟と遊ぶことがあります。高1と小4がやっているとは思えない幼稚なじやれ合いですが、それでもやっている僕は“兄バカ”なのでしょう。将来の僕にはどうか“いい兄バカ”になって頑張って欲しいと思います」

この授業を決意した時から、家族や親戚など身近に障害を持つ生徒がいる可能性は十分に想定していた。この課題を生徒に示す際に、授業の意図ときょうだいに障害をもつ友人と私との会話を話した。けれども、当事者である彼がこの課題にどれほどの衝撃を受けたのか、想像もできない。将来への不安を感じさせて、どこまで私は“責任”をとれるのか？本当にここまで向き合させて良いのか？自問自答した。

私は、「当事者でない人に知的障害者のことを分かるとは思わない」と言われた言葉に向き合うことを決意したんだ。当事者にとどめ、生徒全員にとどめ、必ず意義ある授業をしようと、決意を新たにした。このような生徒達の作文を編集して冊子「知的障害者のきょうだい」を作成。そして2時間にわたる授業と対話集会を行うことにした。

1時限目「きょうだいという立場」

「2つのミカンを3人で分けるには？100通りの方法を考えてください」

授業の冒頭で、ミカンの実物を2つ持った私はこの発問を生徒に行った。この唐突な質問に対する生徒達の答えは実に様々であった。

「2つをそれぞれ3等分して分ける」
 「中身、中身、皮で分ける」
 「ミカンでケーキを焼き、3人で食べる」
 「ミキサーでジュースにして3人で分ける」
 「種をまき、10年後実ったミカンを分ける」
 「3人で話し合い、おなかをすかした人にあげる」
 「何もせずミカンの美しさを3人で楽しむ」
 などなど。

こうした様々な答えを出させ、次に私は「では、どれが正解なんだろう?」と問うたうえで、次のように言った。

「どれも答えとして間違っておらず、どれもが正解だ。何通りもの正解がある。しかし、現実に存在するのは、ここにある2つのミカンだけ。何通りもの分け方の中でどの方法を用いるのか?それは考え、議論して決めるしかないだろう。私たちの民主主義の社会は様々な答え、意見を持つ人々の議論によって成り立っている。答えは1つではなく、いくつもある。だからこそ議論し、考えることの大切さをこの授業で学んで欲しい」

普段とは違う重い問題を皆で考え、生徒からの自由な意見を引き出すために考えた発問であった。

この発問から始まった授業では、冊子「知的障害者のきょうだい」で生徒達の作文を読み進めながら、様々な質問を投げかけ、時に映像を見せる形で進めた。

一時限目の目標は、「知的障害者をきょうだいに持つ立場」を考えさせることである。

「級友がこの課題を“ガイジの作文”と言っているのを腹立たしく思った」との意見であったり、「“ガイジ”という言葉を口にしていた自分を省みる」意見。「きちんと教えることによって障害者について正しい認識をもった大人になっていくと思う」といった意見の後で、「何か特別な授業を繰り返しても何の意味もないと思う。ほとんどの生徒には障害者なんて頭がおかしいばかな人間という概念しかない」という意見を紹介するなど、知的障害者に対する意見や認識にそれぞれ違いがあることを示した。

こうした意見を紹介しながら、私は「“ガイジ”という言葉を口にしたことがない人はいるか?」と -

質問し、手を挙げた生徒に「どうして言ってはならないのか?」と問うた。彼の答えを聞いたうえで、私はこんな話をした。

「私は中学生の頃の君達が“ガイジ”と平然と口にすることに強い違和感を覚えて、この授業を思い立った。数年前に、君達の中のある生徒が【アルプスの少女ガイジ】と笑いを狙って口にしたのを鮮明に覚えている。けれども私は“ガイジと口にするな”と言いたいから、この授業をしているわけではない」

私はこの授業を行う2週間前に、ある障害者団体を訪ねていた。私がどうしても気がかりだったのは、当事者の方がこの授業をどのように感じられるのか? ということだった。私は「生徒の発した【アルプスの少女ガイジ】という発言についてどう感じますか?」と質問した。

身体障害を持つその方は「笑えますね。面白いと思いますよ。“クララは立った”って言葉が添えられたら、もっと面白い。だけど、その言葉を誰が発しているのかですよね。下半身不随の私がその言葉を言えば、笑えるだろうけど。健常者が障害者のいない所で言うのは“幼い”と思いますね」と言われた。

私は生徒達に、この方との会話を紹介し、次のように話した。

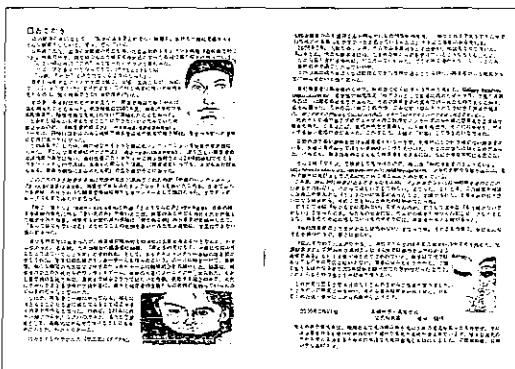
「単に“ガイジと口にしないこと”だけをもって“正しい”認識なのだろうか? きょうだいが、社会の偏見と板挟みになり苦しみながら、障害者を疎ましく感じる気持ちは“正しくない”認識だと言えるのだろうか? 例えば、結婚したいと思った相手に障害を持ったきょうだいがいると言われたら、君はどうするだろうか?」

そう問い合わせたうえで、ある映画の1シーンを見せた。それは『愛するときに話すこと』という韓国映画。精神の病を持つ兄がいる男性と父の残した多額の借金を抱えた女性、それぞれ事情を抱えた2人のラブストーリーを描いた映画である。この映画の中に、精神障害で錯乱した兄に苦しみ、そのことを女性に伝える場面の20分を抜粋して見せた。映画はフィクションであるが、「障害者の家族を持つ人の重みとは何か?」を感じ、考えさせるには、これが最適だと考えた。

この映画を見せた後で、先の作文『兄バカと障害者』を紹介した。「言えることは、僕と弟は兄弟なんだということです。弟が障害者だろうが、それに対する世間の目が冷たかろうが、そのせいで僕が独身にならうが、親が亡くならうが、僕と弟は兄弟で、僕は弟と一生付き合わなければいけないのです。……将来の僕にはどうか“いい兄バカ”になって頑張って欲しいと思います」

級友の中に「知的障害者のきょうだい」がいる。将来の自分に対して“いい兄バカ”になって頑張って欲しいと書いた級友がいる。当事者としての真摯な声に教室は静まりかえった。「私たちは知的障害者とどのように接し、どんな社会を築いていくべきなのか？それを皆で真剣に考えたい」。そう言って1時限目の授業を終えた。

2時限目 「障がい者に対するイメージを考える」



授業冊子「知的障害者のきょうだい」

2時限目の授業では、「障害者に対する見方、イメージを変える」事を狙いとした。

授業の冒頭でHP「くるりんぱ」(<http://www.kururinpa.com/>)を見せた。キツネに見えていたイラストが、「くるりん」と回転するとアシカに見えたりと、様々なイラストがクリック1つで「くるりんぱ」と変化するHP。これを導入とした。スクリーンに映したイラストを見せ、次々と「何に見えるか？」と尋ね、生徒の答えが出るとクリック1つで絵を回転させ、別の動物に変えてしまう。「ものの見方は1つではない」という遊びをしてみた。

また、前回の授業の最後に宿題として、「片方だけのスニーカーをもらったら、どんな利用方法があるか？」考えてくるように言っていた。

「ぬいぐるみの家にする」「靴ひもを持って振り回し、戦闘用の武器にする」「穴を開けてランプシェードにする」「植木カバーにする」「親とけんかして家出したときに、その片方だけのスニーカーを玄関に置いて出て行き不思議に思わせて仲直りのきっかけにする」などなど。

「ものの見方は1つではない」。それが今回の狙いなんだと伝えたかった。この授業に至るまでに、アートの力で障害者の社会参加に取り組まれているアトリエインカープ理事長の今中博之さんに直接話を聞く機会があった。先のHP「くるりんぱ」も今中さんに教えて頂いたものである。「ただの石ころでも、光の当て方を変えれば、美人になる」「IQ 知能指数でしか測らないから光らない」。幸せをデザインする今中さんの言葉を振り返った末に考えた導入だった。

アートの力で高い評価を受ける知的障害者や今中さんの取り組みに感動する一方で、刑務所にしか行き場のない障害者がいることを『累犯障害者』で学ばせて頂いた。著者の山本譲司さんとも直接お話しさせて頂く機会があった。「俺はこれまで生きてきた中で刑務所が一番暮らしやすかったと思っている」そう語る障害のある受刑者と社会の現実。障害者をめぐる陰と陽の両極端の現実に思いを巡らした時、知的障害者に対する見方やイメージを今一度考えることが大切だと思った。

このような導入を行った上で、『障害者はやっぱりいやだ』と題した次の作文を紹介した。

「僕には、ケン兄ちゃんという障害を持つことがあります。ケン兄ちゃんは知的障害者でうまく言葉がしゃべれません。けど、それ以外は普通の人となにも違いません。部活もしているし、普通に高校にも行っています。むしろ普通の人よりもすごいくらいです。

ケン兄ちゃんは明るくて、とても優しい人です。けど、僕はどうしても自分から積極的に話しかけた

りすることが出来ません。何を言っているのかよく分からないし、何よりも心の中で差別しているからです。表面上は、ニコニコしながらしゃべるけれど、心の中ではいちいち面倒くさいとか、障害者だからニコニコしゃべってやるか、とか最低なことを思いながらしゃべっていることがたまにあります。

というのも、ケン兄ちゃんには、障害を持たない普通のお兄ちゃんがいて、ついそのお兄ちゃん、ケン兄ちゃんを比べて、“なんでこんなに違うんだろう”と思っているからです。

小学生の時、お兄ちゃんに“ケン兄ちゃんと一緒にいるのはしんどくないの？”と聞いたことがあります。その時、兄ちゃんはたしか“別に普通の兄弟なだけで、特になんにも思わない”と言っていました。僕はこの時、なんでそんなことが言えるのか不思議でした。周囲からの目も気になるだろうし、何よりも恥ずかしくないのか、とか色々な疑問がありました。

もし、自分の兄弟に障害者がいたら、絶対に僕は耐えられないと思う。ああいう疑問に思ったことが本当にありそうで怖いからです。それに、もっと重度の障害者だったらと思うと、兄弟とは思わず差別てしまい、絶対に普通に接することは無理だ。それにお兄ちゃんは、ただきれい事を言っているだけだと思っているからです。

この作文を書くにあたって、いろんな人の意見をよんでいくうちに、障害者の兄弟を普通と思っている人がいるということに気づかされました。そしてそういう人たちは、みんな兄弟の努力や心を知っている人なのだということに気づきました。おそらくお兄ちゃんもそういう人の一人なのだと思います。というのもケン兄ちゃんは何事も一生懸命にやる人だからです。なのに僕はそれをそんなことも出来ないのかよと、最低な視線で見続けていました。

冊子を読んで、障害を持つ人の方が、僕なんかよりずっと努力をしているし差別にも耐えているすごい人なのだと実感させられた。けど、やっぱり僕には障害者の人と普通に接することはできない。結婚相手の兄弟に障害者がいたら、世間体を考えて逃げると思う。もし兄弟に障害者がいたらじめにあうかもしれないから、友達に知られたくないという考えが体から離れない。

多分、僕は意識しても心から接することが出来ないかもしれない。なぜならきっと僕の心の中には【障害者 = かわいそう】という考えが根付いている、きっと上から目線でものを言ったり、心のどこかで同情で行動してしまうと思うからです。ただ心からの行動でない行動が許されるのであれば、協力したいと思う

この作文を読んだうえで、私は【障害者 = かわいそう】という考え方、イメージが根付いているという彼の言葉について考えてみたい」と言い、次の映像を見せた。それはNHK『きらつと改革委員会・発展編』(2008.12.06放送)。この番組は、障害者は“きらつと”生きなければならないのか？を徹底討論したものである。

この中の「障害者は日本のメディアでどのように描かれてきたのか」を伝えた6分間を抜粋して見せた。

「障害者はかわいそう。親は大変」と伝える1958年の映像、脳性マヒの子どもを殺した母親への減刑嘆願に「障害者は殺されても仕方ないのか」と当事者が立ち上がった青い芝の会の1971年の映像、そして「不幸」「かわいそう」という障害者へのイメージを変えようとする1981年の国際障害者年の映像。

こうした日本のメディアでの障害者の描かれ方の変化を見せ、障害者に対するイメージを考えさせた。この後「身体障害者と知的障害者」と題した生徒の作文を紹介した。

小学校時代の様々な障害を持った級友との関係を振り返った彼は、身体障害を持つ級友に対しては好意的な雰囲気があったが、知的障害を持つ級友はイジメられていたことに触れていた。そして「なぜ身体障害者は、社会の中で皆に助けながら生活を送っているのに、知的障害者は軽べつされ、避けられる生活を送らなければならないのだろうか？」と投げかけていた。

私は、「君達が口にしていた“ガイジ”という言葉は、身体障害者と知的障害者どちらを指しているのだろうか？ それとも障害者全体を指しているのだろうか？ どれだと思うか？」と尋ねた。

多くの生徒が知的障害者を指しているととらえていた。この問い合わせの後で、私はこんな話をした。

「かつて、この学校で、車イスを体験する人権学習が行われたことがあった。車イスに乗って学校を回るというもの。私はそれが疑問だった。もし車イスに乗ることで身体障害者の視点に立てるのなら、どんな体験で知的障害者の視点に立てるのだろうか？ そんな疑問を持ったことも、この授業をやりたいと思った動機の1つなんだ。この授業では、知的障害者について考えたいと思っている」

統いて、先のNHK『きらっと改革委員会・発展編』の中の英国でのメディアのあり方を伝えた7分間を抜粋して見せた。

障害をあえて笑いにするコメディー『Little Britain』、「あわれみなんていらない」とメディアの描き方に抗議した1992年の英国障害者運動の映像、そして障害者を“勇敢なヒーロー”や“あわれむべき犠牲者”などの特別な視点では描かなければ方針が出来上がった現在の英国の状況。こうした映像で、【障害者＝かわいそう】というイメージが果たして“正しい”のか？ を考えさせた。

ある生徒は「本当に失礼だし人権を無視した意見だが……“この子がいたお陰で強くなれた。痛みの分かる人間になれた、家族の絆が強くなった”という人もいるだろう。しかしそう思えるまでには、それ以上の苦労や悲しい思いを乗り越えている。出来れば、そんな苦労や悲しい思いはしたくない。知的障害の家族がいるために、自分の人生や人生における選択に制限をつけたくない。それが僕の率直な意見である」と作文で述べていた。

【障害者＝かわいそう、家族＝大変】というイメージだけで考えると、彼のような“率直な結論”になってしまう。それで良いのだろうか？と考えさせたかった。先入観や偏見、そして無知、またメディアによって作られたイメージを揺さぶることが必要だと考えた。

こうして自分たちのイメージや偏見、先入観を考えさせた。その上で現実の家族はどうなのか？を考えるために『きょうだいだって愛されたい』という本を取り上げた。この本は「全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会」によって編集され、障害者のきょうだいの体験や課題、支援策がつづられたものである。

幼児期・学齢期での普通の家庭とは違うという思いや友人の反応、青年期・成人期での結婚を巡る課題、中・高年期での親亡き後の関係などについて当事者の声がつづられている。すべてを紹介することは出来ないが「実はそんな大した悩みではなかったりすることも多いので、きょうだいに肩をたたいて、壁を壊してくれるような周りの声かけがあつたらよかったです」と「あの結婚する前の心配は……しなくても良かったんだと、もしもっと早く分かっていたら、自分の結婚についても、もっとのびのびと考えられたなあと今さらながら思っています」など、悩みと共に重みを持つて当事者の体験が語られている。

この体験談の抜粋を黙読させた上で、生徒達に授業を受けた感想文を書かせた。生徒の感想を抜粋して紹介したい。

「“みんな一緒に、平等なんだ”とひたすら教えるだけではなく、健常者が障害者との間に感じる違和感を認めた授業だと感じた。冊子の中の生徒の意見も参考になった。特に【心からの行動でない行動が許されるのであれば協力していきたい】と書かれた人には、“よくここまで自分に正直で、かつよく考えられた文章を書けるなあ”と感心し、共感した。自分も知的障害者に対する同情、偏見を捨てきれないし、将来においても捨てられないかもしれません。しかし(月並みな言葉だが)結果より過程、積極的に相手を理解しようと尽くすしかないと思う」

「授業を受ければ受けるほど知的障害者に対する接し方って難しいと感じました。周りに知的障害を持つ人がいない僕にとって、無知は恐怖にしかならなかつたし、同情は障害者を見下す気持ちしか生み出しませんでした。だから、障害者に接する時に、相手はもちろん、親族の方にも失礼にならないように、もっと障害者を知つていかなければならぬと思いました」

「この授業を受けた帰りの電車で、知的障害者の方がいた。授業を通して知的障害者への接し方を改めて考えたつもりだったが、“気持ち悪い”“かかわらんとこ”とか避けている自分がいた。やっぱりこういう授業を受けても、いざ知的障害者を前にすると以前と何ら変わらない自分がいました」

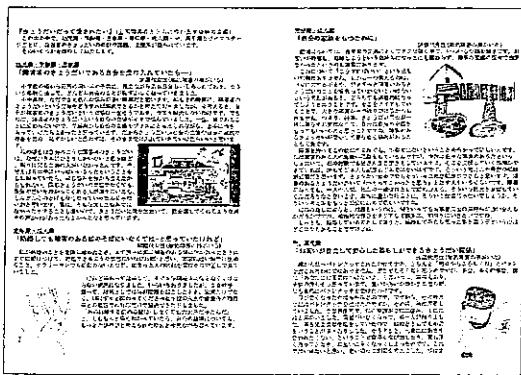
た。身近に知的障害者がいないと、その接し方や考え方を変えるのも難しいと思いました」

生徒それぞれが「答えが簡単にはでない」中で考え、葛藤している様に思えた。そして『兄バカと障害者』を書いた彼は、次のように書いていた。

「僕には知的障害の弟がいますが、この事についてここまで深く考えた事ではなく、この授業で、かなり考えさせられました。深く考えてみると不安ばかりで、本当にどうしようかと思いましたが、こんな人間は自分1人ではない事を知って、すごく安心しました。もう10年以上も弟と付き合ってきても、やっぱり少しかわいそうだ、不幸だと思ってましたが、本人からしたらそうは思っていないことを知って、これからは容赦なく!? 付き合っていきたいと思います」

この感想文を書かせながら、授業の最後に私はこう言った。「この授業の締めくくりとして、知的障害の妹を持つ方に来て頂いて“対話集会”を行います。感想文にどんなことを聞いてみたいか？ 質問を考えて欲しい」

当事者との格闘



授業冊子「知的障害者のきょうだい」

この取り組みの中で、考え込み、最も格闘したのは当事者と向き合うことだった。5年間にわたって何を切り口にしてこの授業をするべきか探し、「知的障害者のきょうだい」をテーマにすると決めた時から、生徒と対話してほしい当事者として

“彼”が最もふさわしいと分かっていた。けれども“彼”にそんなお願いをしてもいいのか？ 私は当事者としての“彼”に向き合うことができるのか？ 不安でならなかつた。

“彼”とは同僚の先生である。彼と私はこの授業を行った生徒達を中学一年生から担当してきた。生徒達にとって4年間にわたって授業や行事など様々な場面で身近に接してきた先生である。彼に知的障害を持った妹さんかいることを私は出会って間もない頃に聞いた。数年前、彼にこの取り組みについて話し、妹さんについて聞いたことがある。その時彼は「知的障害者について分かって欲しいと思っていないし、分かるとも思わない」と言った。強烈な拒絶・壁に衝撃を受けたのをはっきりと覚えている。臆する気持ちも生まれたが、取り組みについてもつと考へるようになつた。しかしそれ以降この事について彼と話したことは一度もなかつた。

「知的障害者のきょうだい」の掲示板を初めて読んだ時、これを切り口に授業をしようと決めた時、何度も彼の言葉が思い浮かんだ。もう一度話をしたいと思ったが出来なかつた。知的障害のある弟やいとこがいる自分に真摯に向こうとした生徒達の作文を読む中で、やはり彼に生徒と対話して欲しいと強く思った。私も「障害者について分かるとも思わない」との彼の言葉に真摯に向こうべきだ。けれども「教師」としてではなく“知的障害者の兄”として、生徒と「対話」をお願いすることは、プライバシーに踏み込みすぎではないのか？ カミングアウト、内面をさらけ出すことを他人に強いてもよいのか？ その後の生徒との関係は？

何度も考えあぐねた。そして彼に話をしてみようと決めた。

いつも冗談ばかり言う私からの「真剣な話があるから時間をとってほしい」との言葉に驚く彼に、授業について話をし、生徒の作文を読んでもらつた。そして“障害者の兄”として、「対話」してもらえないかとお願いした。複雑・真剣な表情で話を聞いてくれた彼に返事は後日、聞かせて欲しいと言つた。

そして一週間後。彼は「自分に当事者として何

を生徒に伝えたいのか、明りょうにはわからない。障害者のことについては、意識的にも無意識的にも考えようとしてこなかった様に思う。生徒に話をするのは構わないが、なにか自信がない」と言つた。それから色々な話をした。「小学校の頃、妹が家にいるから、友達を自宅に呼べなかつた（呼びたくなかった）こと」「結婚の際に、妻に妹の知的障害について話をした時、絶句されたこと」「私が対話してほしいと言われていることを母親に話した、そして彼の母が生徒の作文を真剣に読んだこと」。そんな話を聞かせてくれた。一方で、彼は「あの掲示板に書かれていたような（ドロドロした）感覚は持ったことがない。こんなに真剣、深刻に“障害者の兄”として考えたことはない。誰かと“障害者の兄”として深く話をしたこともない。だから、自分自身、妹のことについてまだ整理のついていない状態かもしれない」と言っていた。

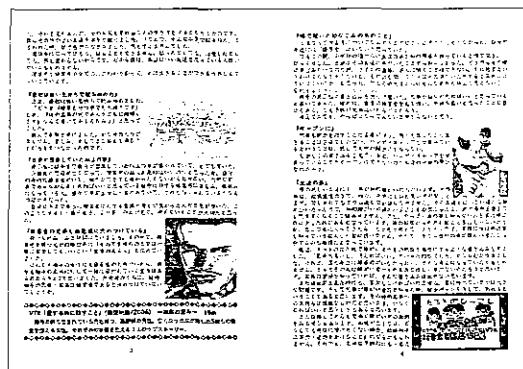
覚悟して彼と話をしたものの、意識的にも無意識的にも考えてこなかった事に向き合わせる形となり、非常に複雑な気持ちになった。「授業のためにここまでするべきなのか？」分からなかつた。いつも和気あいあいと一緒に働いている彼の口から聞いた“障害者の兄”としての言葉。今さらながら彼を当惑させ、直面させてしまう事が心苦しかつた。それでも彼は最後に「自分自身のためにも、生徒に話をしてみる」と言ってくれた。

「社会にある課題を生徒と一緒に葛藤する」。実は、このような取り組みをしたいと思ったのは7年前の本村洋さんとの出会いがきっかけである。本村洋さんとは、光市母子殺害事件で妻と娘を殺害された被害者遺族である。7年前偶然、本村さんが出演された番組を見た私は、この事件と本村さんの訴えを切り口に「生徒と死刑制度の是非を考えたい」と思った。そして中学三年生と共に妻と娘を殺された被害者の思いを知り、生命の尊さとは何か？罪を償うとは何か？を考える授業を行つた。最後には本村さんを学校にお招きして生徒と対話して頂いた。憎しみ、悲しみと向き合い行動される本村さんに心から感動した。「悩んで初めて人生が分かる」。そう感じた。本村さんは「人生とは偶然を必然にかえる過程である」という言葉が

好きだと言われた。悩みもがきつつも力強く生きる。そんな姿をもう一度伝えたい、もう一度生徒と味わいたい。それが「社会にある課題を生徒と一緒に葛藤する授業」に、私を突き動かした原動力だった。

話がそれたかもしれないが、葛藤しながらも“障害者の兄”として対話すると言つてくれた“彼”。「悩んで初めて人生が分かる」。本村洋さんから感じたような力強さを感じ、心から感謝した。

当事者との対話集会



授業冊子「知的障害者のきょうだい」

2時間にわたる授業を踏まえた対話集会は高一270人全員が参加して小講堂で行った。授業調整も難しく、40分という限られた時間となつた。生徒の「当事者の方に聞いてみたい質問」を整理して、事前に数名の生徒に質問者を依頼する形で、対話集会を行うことにした。また彼にはその質問事項を渡しておいた。

当事者との対話集会は告げていたものの、その当事者が誰なのかは、当日まで生徒にはあえて言わなかつた。司会の私が進行方法を説明した後で、私は生徒に「きょうだいがいる人は?」「自分の友人や知人で、きょうだいに知的障害を持つ人がいる人は?」と質問し挙手させた。挙手させたのは、この対話集会で何か聞きたいことがあれば、こんな風に手を挙げて欲しいと伝えるためでもあつた。そんな導入をした上で、私は「では、○○先生お願ひします」と言った。ざわめきがやってき

て、一瞬で沈黙がやってきた。

やや緊張の面持ちで演壇に立った彼に、まずは私から家族構成や、知的障害を持つ妹さんの年齢やどのような障害かを質問した。その後、質問者の生徒から例えば、こんな質問が投げかけられた。

「僕は知的障害者の人に対して怖さがあります。会話がしたくても通じないからです。障害のある方とコミュニケーションは、どうしたらいいのでしょうか？」

彼は「妹と普通には話は出来ません。けれど、君達が外国人と話すとき、英語が話せなくとも本当に会話をしたいと思ったら、相手も自分も何を伝えたいのか分かろうとするよね。それと似たように、妹が何をしたいのか知ろうとしているだけです」と答えた。

この対話集会がどのようなものだったのか、どう表現すべきか難しいが、実はアタリマエのことを真剣に伝えたものだったと思える。身近な彼からのカミングアウトに驚く生徒、また幾分緊張した彼や気負いすぎた私がいたことを除いては、集会で話されたことは、実はアタリマエの事柄だった。それは妹とどのようにコミュニケーションしているのか？との質問に対する彼の答えにも表れているように思える。

他の生徒からは「他人に妹のことを話すのは、どんな気持ちでしたか？」「普段の生活の中で知的障害者の方を見たときに、どのように思いますか？また、もしその知的障害者の方がバスや電車で他人に迷惑をかけている時はどうしますか？」といった質問があった。

彼は、「あまり他人に妹のことを話したことがなかった。妹が家にいるから、友達を自宅に呼びたくなかつた」「普段の生活で知的障害者を見てもあまり何も思いません。迷惑をかけていたら止めるべきだとは思うけれど」と、考えればアタリマエだなっと思える回答だった。

振り返ると、なにか“衝撃”的なものを期待していた自分を反省する。静かに予定していた質問が進んだ。そんな中で、集会の空気が少し変わったのは次の質問だった。

「結婚相手の方の反応はどのようなものでした

か？また、相手のご両親には話をされたのですか？」

「妻に妹のことを話したのは、実は妻の家に結婚のあいさつに行ったときのことでした。付き合っている間、そのことは言ってませんでした。妹のことを知った妻は絶句しました。結婚寸前までそのことを言わなかったことで、彼女を傷つけたとすれば、悪かったと思っています」と彼は答えた。

なにかモヤモヤした空気の中で、「すいませんが私から質問させて下さい。なぜ悪かったと感じるのですか？」と、私から尋ねた。たたみ掛けるように「言わなかったのは、そんなこと関係無しに奥さんを愛してたってことですか？」と、新婚ホヤホヤの彼をからかうことで静まった空気に笑いを誘ってみせた。

笑いながら彼は「悪かったなと思うのは、その後、“なぜか怖い”と奥さんに言われ泣かれたからです。で、奥さんを愛してます」と答えた。

結婚や就職などでこそ、語られず考えられずにいた事柄が、表面化する。その後、何かが破れたように何人の生徒から手が上がり、予定していない質問もあがつた。最後の生徒の質問は「兄弟の夢は何ですか？」。先生の妹さんへの思いを知り、あつと言う間に40分の対話集会は終わった。最後に私から「何らかの障害を持つ人は私たちの社会に5%はいるとされている。実は身近な問題であるにもかかわらず、障害者について考える機会は実に少ない。きょうだい、家族の方がそのことに向き合い、語る重みは想像も出来ない。妹さんのことを話してくれた彼に本当に感謝したい」と締めくくった。

取り組みを終えて

対話集会もやり終えた。格闘してきた取り組みは終わった。達成感もあった。けれども、これが何だったのか？うまく言葉にできない状態が続いた。そんな中で、私は以前からやってみたいと考えていた事を始めた。それは知的障害者と接することである。5年間、取り組みの切り口を探す中で知的障害の方と話し、かかわることは何度かあった。けれども、体験や関係性を作ろうとはしなかつ

た。それは、私の日常生活では通勤電車などで見かけることはあっても、それ以上の関係にはならない。多くの生徒が同じような状況だと思えた。だから私が知的障害者と関係性をもつて考えてしまうと、何か“上からの体験”で考えさせてしまうことになるのではないかと思っていた。どう接すれば良いのかわからぬという気持ちもあったと思う。授業を終えた今、知的障害者と接してみたいと思つた。

私は障害者に水泳指導を行うNPOボランティアに登録した。スポーツは苦手な私だが、市民プールで知的障害を持った人と一緒に泳ぐボランティアを何回か行った。何だか申し訳ない気持ちを隠せないが、仕事を早く切り上げて平日の夕方に自費でプールへ毎週通うことが負担になり、数か月でやめてしまった。何度か知的障害者と泳いだ体験から言えば、彼が対話集会で言ったアタリマエのことが、接してみるとアタリマエに分かった。言葉は通じない、手足がうまく動かせない。だけど実は特別な事はなくて、分かつて接しているから、一緒に水泳に挑戦したことだった。

関係性を作るには至らないまま終わってしまったことを心残りに思いながら、「あの授業って何だったのかな?」と考えていた。授業から半年が過ぎた頃、驚く出来事があった。

ある保護者から話がしたいと言われた。伺うと、普段は余り話さない息子から授業のことを聞き、授業冊子を読んだと言う。そして「息子の弟は知的障害を持っているんです」と言われた。この生徒は「いい兄バカになってほしい」と書いた生徒ではない。

お母さんは「知的障害者のいないこの学校で、このような授業を行ったこと、そして最後に知的障害者の兄として、○○先生が生徒に話をしたと聞いて、驚きうれしかった。そのことを私に伝えたかった。そのことを話したいと思った」と言られた。

突然、このような声を聞き、驚くと同時に本当にうれしかった。お母さんいわく、息子はあの授業冊子をクリアファイルにいれて大切にしていたという。涙が出るほどうれしかった。同時に、彼は弟が知的障害を持つことを授業では言わなかつた。それぞれが抱く違和感や偏見と率直に向き合

うこの取り組みは、当事者の方を不安にさせ、傷つけかねない事柄も含んでいる。その事の重みを改めてかみしめた。

障害者団体を訪れて、この授業を相談した際「考える力をつけるために、わざわざ障害者を題材にするのですか?」と聞かれた。当事者ではない私が、障害者を扱うことの危うさを指摘された。その方は中学生の時に体育館の屋上から滑り落ちて、下半身不随になった自身の人生を語られた。そして「もし障害が治る薬があつても自分は飲まない」と言われた。その当事者としての力強さには強くひかれた。それでも私は、「当事者ではない立場から考え、伝えられる“何か”があると思う」と答えた。

その“何か”がうまく言葉にできずにいた。“何か”とは「他者との対話の大切さ」だと考えている。かつて仏の哲学者シモーヌ・ヴェイユは時代の病理を「善に関する言葉の堕落」と喝破した。現代社会には、人権や平等などの「善に関する言葉」を冷笑的にとらえ、口にすることをちゅうちょする雰囲気があるのでないだろうか。ある生徒は夏休みの課題で次のように書いた。

「正直、最初は軽い気持ちで読み始めました。どうせ【障害を持つ弟でも大好きです】とか、【彼の兄弟が何であろうと私は結婚します】なんて書いてあるんだろう、と思ってました。読んで衝撃を受けました。かなりの人々が深く悩み、苦しみ、そしてまだ答えを得ることが出来ていなかつたのです」

この“どうせ「差別してはならない、人は平等である」って言いたいんだろ”と「善に関する言葉」を冷笑的にとらえてしまう現代社会。その背後には生きていることのリアリティーや他者との対話の欠落があるのでないだろうか。

情報化社会の中で不条理な出来事が日々、伝えられる。しかし私たちにはその瞬間には怒りや悲しみの感情をもつたとしても、「立ち止まって考えること」はせず、繰り返される不条理な出来事を“刺激の強弱”を物差しにして、情報を処理しているのではないだろうか。情報の多さに感情を浮かび上がらせることが出来ず、他者の痛みや悩み、苦

しみへの感受性が失われている。そして、人々は自分の世界に引きこもり、他者を思いやる「善に関する言葉」を冷笑的にとらえてしまうのではないだろうか。様々な社会問題を扱う政治経済を教えてきた実感である。

だからこそ「他者との対話」が大切だと考えている。違和感や偏見を抱く自己と向き合う「内なる対話」、そして他者の苦悩と向き合う「外なる対話」。自己と他者の打ち合いの中で、とことん考える。苦悩や葛藤、ためらい、熟慮、決断といった他者と自己と向き合った格闘の中で、社会の一員であるとの実感、生の手応えを感じる。この「他者との対話」による実感や手応えが、冷笑主義や無関心を打ち破り「社会をよりよいものにしていくにはどうしたらよいか」という社会科の目標の力になるのではないだろうか。その為には教師自身が「社会にある課題を生徒と一緒に葛藤する」ことが必要である。私はそう考えている。

この取組の中でたくさんの方々と出会い、学ばせて頂いた。きょうだいが現実と向き合い、考える重みは計り知れない。話してくれた彼・彼女に心から感謝している。

参考資料

授業で用いた冊子「知的障害者のきょうだい」
夏休みの課題で用いた冊子「障害者を考える」